

要求論 (Need Theories) — その 1

藤 井 竜 和

I 序—本能論よりの反省

本能 (instinct) とは, Hilgardによれば, 「種に独特な, 無学習的でパターン化された目標追求的行動 (例えば鳥の造巣<nest-building>や鮭の移住<migration>によって例証される)」と定義される。しかし, これが本能であると断定する (decide) ことの出来るのは, 動物の行動を観察した後言えることであって, そこには, 反射や走性によるものも本能とし, あるいは馴化や条件反応・学習によるものもすべて本能とみなす危険性がひそみ, いたずらに行動の列挙に終る杜撰さがあった。

今日, 行動科学の名の下に, いづれが反射的か走性的か本能的か学習的かを求めるよりも, 行動という概念から今迄の反射・本能を見れば, より明白なる区別を見るであろうとされている。根源がどうであろうと, 行動をみれば, 行動のパターンは自ずからいくつかの差違があるという訳である。今日, 動物の行動は, かくして次の様に分類されている。

I. 生得的 (先天的) 行動……経験, または学習的過程によって変容されていない行動で, この中には次の3つが数えられる。

- 1) 反射的行動
- 2) 走性的行動
- 3) 本能的行動

II. 習得的 (後天的) 行動……経験, または学習的過程によって変容されている行動で, 次の3つが数え上げられる。

- 1) 馴化的行動
- 2) 条件反射的行動
- 3) 学習的行動 (広義)

動物には進化の順序があり, その根源は中枢があるもの, 即ち脳の相違によって動物と動物, 動物と人間の行動の差違を認めることができるという神話が現代にはある (時実利彦)。しかし, 脳のどの部位が, どんな行動を起しうるかということの決定もなかなか困難な面もあるようだ。この方面の研究は, ガル(gall)の骨相学から続いているが, 人間の研究の方面では, 本能の研究の終着駅が行動の羅列に終った杜撰さをいましめて, 医学面での脳の研究が進み, 一つの要求論を形成した歴史が心理学にはある。この方面の研究は, 「行動を衝き動かす因」としての動因(drive) という方面から追究がなされ, それは, 更に「欠けているから動因となるのだ」という心理の底たる要求 (need) の研究へと進んだわけである。しかし, 動因も要求も, 果としての行動からみると, 欲しているのだと考えられ, 欲求(want)という名の下に総括される。すなわち, 欲望や願望や希求(desire, wish, aspire, ambition, want)の無いところには行動はないのであって, それが物質的(avarice, greed, covetousness, love of money)であれ, 官能的(desire, cupidity, appetite, passion; Begierde)であれ, 精神的(spirit, psyche)であれ, 欲求がないとは言えないので

要求論 (Need Theories) —その1

ある。しかし、これは、Gestalt Psychology の如く、人間を全一体、全体的にみる余り、一体的にみた分析という立場をとり、情緒や感情が入る余地をゆるした。McDougall が本能の研究に於て情緒を無視することが出来なかった様に、欲求の意味には、今日、情的なニュアンスが強い。しかし要求なる語は、より物理的・化学的で、その無機的唯物的な語感とニュアンスから、科学的心理学を標榜する現代心理学ではもっぱら好んで使われている。

さて、要求論の是非を論ずる前に、先ず提示された要求論を一覧するのがよいであろう。

II 要求論のさまざま

古来、欲求の問題は、ロゴス (logos 知的素質) に対するパトス (pathos 情意素質) の問題であった。情 (感情) と意 (志) は密接に関連してこれを区別することは非常に困難な場合が多い。

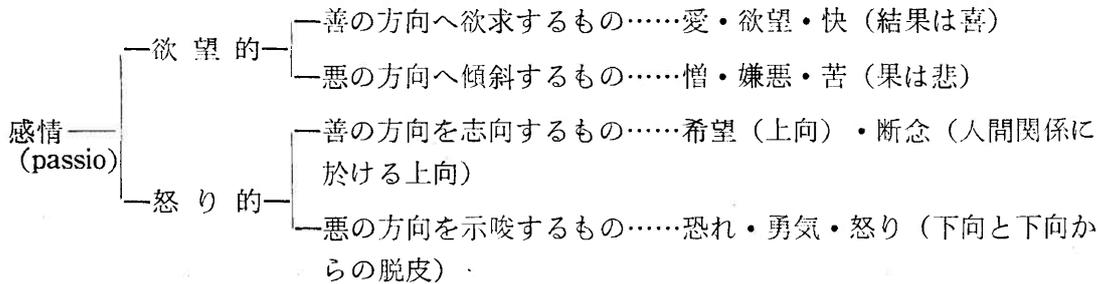
したがって、欲求の問題は感情 (passions) の問題とされ、それで感情とは、欲望・怒り・恐れ・安心・羨望・喜び・愛・憎・憧れ・競争心・憐憫など快苦を伴う状態とされていた (Aristoteles)。インドでも欲求は感情生活から出処するもので、快苦を伴うものであるという立場をとっている。

1) Thomas Aquinas (1225~1274) ……パトスに関する中世の思想は、トマス・アクイナスによって大結実をみた。彼は、passio (感情) の語義を区別し、精神が受動的に動かされるのは偶有性 (Zufall) によるとし、その介在物を身体とした。そして、エネルギーの運動は、身体から精神へ、精神から身体へも及ぶものと考えた。かくして感情は2種ある。

1. 身体的感情 (passio corporalis) ……傷のようなもので、運動は身体から精神へ波及する。
2. 精神的感情 (passio animalis) ……怒り・恐れなどのもので、運動は精神から身体へ波及し、身体的変化を結果する。

欲求を論ずるとき、我々も、これに倣って(1)身体的要求 (身体→精神)、(2)精神的要求 (精神→身体的変化) を区別できようというものである。しかし、愛・喜びなどは、神・天使・人間のある場合に向けられる時、それが知性的な欲求に於てある限りでは感情ではなく意志であると彼はしている。かくて、知性的欲求の同様な運動は、屢々同じ名で呼ばれるが、感情ではない。但しそれは、エネルギーの過剰流出によって感覚的欲求を衝き動かし、身体的擾乱 (bodily disturbance)、となり結果的に感情となることもある。知性的欲求は、彼の場合、一般的な善ないしは望ましきもの (the desirable)、すなわち価値に向けられて単一であるのであるが、感覚的欲求は感覚的な善・悪の価値、すなわち結果的には快苦につながるものに向けられを欲求的欲求 (appetitus concupiscibilis) と、障害がある場合認知的な感覚から、やはり、善・悪が想定される方向へ動く怒りの欲求 (appetitus irascibilis) が区別されるとした。かくて彼は感情を次のように欲求の面からみた。

要求論 (Need Theories) —その1



正にパトスは動因が含まれていることを喝破している。そして、個体にとって望ましきもの (一般的価値) と望ましくないもの (反価値, 低い価値) へ向う価値志向をも含めて、それが感情につながることをみてとっている。このように、欲求の発現の前後には必ず感情 (need-satisfaction 喜悅と不快及至は不協和) がある訳であるから、近時の要求論からみると非常に人間性あふれた温い、要求の考察になっている。

2) Vives ルドヴィックス・ヴィヴェス(1492—1540)。彼は愛 (amor) 快と (delectatio) を感覚から発するものと考えず、もっと内面的な意志の機能から発するものであるとした。彼は感情をもって、善の獲得、悪からの回避もしくはそれへの抵抗と考えたから、感情もまた善に関係するもの (ad bonum), 悪に関係するもの (ad malum), 悪に対して積極的に闘争するもの (contra malum) の3種に分類した。

(A) 善に向う感情 (Affectus ad bonum)

1. それ自体善である場合：愛, 寵愛, 敬愛 (ad bonum per se : allubescencia, amor favor, reverentia)
2. 現在ある善の場合：愉快, 楽しみ (a bonum praesens : laetitia, delectatio)
3. 未来に善を予想している場合：貪欲, 希望 (ad bonum futurum : cupiditas, spes)

(B) 悪に向う感情 (Affectus ad malum)

1. それ自体悪である場合：不快, 憎しみ (ad malum per se : offensio, odium)
2. 現在ある悪の場合：悲しみ (a malo praesenti : moeror)
3. 未来に悪が予想される場合：恐れ (a malo futuro : metus)

(C) 悪に対向する感情 (Affectus contra malum)

1. 現在ある悪に対向する感情：怒り, 嫉み, 嫌厭 (contra malum praesens : ira, invidia, indignatio)
2. 未来に来るであろう悪に対する準備的感情：自信, 勇気 (contra malum futurum : fiducia, audacia)

彼の分類に対置させてR. Pade は、トマス・アクイナスの分類を試みている (H. M. Gardiner, R. C. Metcalf & J. G. Beebe-Center, "Feeling and Emotion 1937" 矢田部達郎・秋重義治訳・理想社P117—118)。

(A) 欲望的感情 (Passiones concupiscibiles)

1. それ自体善：愛 (bonum per se : amor)
2. 現在ある善として：楽しみ (bonum praesens : delectatio)
3. 未来にくる善を求めて：欲求 (bonum futurum : desiderium)
4. それ自体悪, 離反：攻撃 (malus per se, recessum : odium) Vives のBの1に対置される。

要求論 (Need Theories) —その1

5. 現在ある悪, 離反: 恐怖 (*malum praesens, recessum : tristitia*) Vives のBの2に担当する。

6. 未来にくる悪, 離反: 嫌悪 (*malum futurum, recessum : fuga*)

(B) 怒りの感情 (*Passiones irascibiles*)

1. 未来にくる善, 接近: 希望 (*bonum futurum, accessum : spes*)

2. 未来にくる善, 離反: 断念 (*bonum futurum, recessum : desperatio*)

3. 現在ある悪, 接近: 怒り (*malum praesens, accessum : ira*)

4. 未来にくる悪, 接近: 勇気のわく感情 (*malum futurum, accessum : audacia*)

5. 未来にくる悪, 離反: 悲しみ (*malum futurum, recessum : timor*)

ここで *accessum, recessum* とは, スコラではそれぞれ善に近づき, 悪から離れる運動をいう。

3) *Peregrinus* は, アリストテレスとトマスとを結合しようとして次の様な分類を行った。

1. 欲望的一愛, 憎, 欲求, 嫌忌, 喜, 悲

2. 怒りの一望み, 恐れ, 勇気, 失望, 怒り, 温厚,

3. 混合的一節制, 不節制, 嫉妬, 軽蔑, 情憫, 憤慨, 羨望, 悪意の快

以上いずれも中世までは, 感情と要求とを区別せず, 非常に人間性の追究という点に重点を置いている。この方面の傾向は, 後程, マアレイによって復活される。

近代の要求論は, 感情との交錯によるパトスの不合理性より説きおこさず, また人間を静態的にみた観点から考えられる本能からもみず, もっと人間を動的な連関性のうちにおき, 社会的・歴史的に決定される欲求を問題にするものである。(この項は後に述べらるべきである)

4) W. Thomas (1863~1947) & F. Znaniecki (1882~) ……社会学者とトマスとズナニエッキーは, 社会生活を営む人間に 共通な願望 (“wishes”) (基本的な社会的動機 *the basic social motives*) として4つを区別した。(1923)。

1. 安全を求める願望 (*for security*) ……これは生理的安定を求めるものから, 社会生活における安全を求めるものまでを含んでいる。

2. 感情的反応を求める願望(他人からの応答を期待するもの, *for response from one's fellows*) ……これは人を愛し, また愛されることを望む願望で, 性欲と関連する。

3. 社会的認知を求める願望 (承認を求めるもの, *for recognition*) ……これは他人からの認知・賞讃・尊敬を得たいという願望である。

4. 新しい経験を求める願望(*for new experience*) ……これは1. と反対に革新性をもつ。

5) セイルズ (*Sayles 1928*) は, 児童の基本的な感情的要求として4つを区別した。

1. 安定の要求

2. 独立した人格へ成長しようとする要求

3. 具体的な多少とも到達し得る理想または目標への要求。

4. 仲間 (*companionship*) の要求, すなわち親や同年令のものと一緒にいたいという要求。

6) プレスコット (*D. A. Prescott*) の分類 (*D. A. Prescott, Emotion and the Educative Process, pp.1938, PP.113~125*) 。

1. 生理的要求 (*Physiological needs*)

要求論 (Need Theories) —その1

- a. 有機体に欠くことの出来ない物質や条件を求めるもの……身体的生存の要求に関するもので、空気・食物・排泄・宿り・病気と危険の回避が数えあげられる。
 - b. 身体的活動と適当な休養の配合と調和を求めるもの……活動とその反対の休息を求める要求。
 - c. 性的活動……性的要求
2. 社会的要求 (Social needs)
- a. 愛情
 - b. 集団所属または集団参加
 - c. 他人との類同を求めるもの (“likeness to others”)
3. 自我的要求 (Ego and Integrative needs)
- a. 現実との接触を求めるもの
 - b. 現実との調和 “
 - c. 象徴化の進展 “
 - d. 自己の指導 (Self-direction) の増大 “
 - e. 成功と失敗の^{ランス}均衡 “
 - f. 個性の発揮 “ ……自己の義務と他人の義務とを調和させる成熟した個性の獲得と維持・発展を求めるもの。
- 7) キャロル (H. A. Carroll) の分類 (H. A. Carroll, Mental Hygiene, 1947, P. 28) 1947, P. 28)。
1. 情緒的安定性に対する要求
 2. 成就または支配に対する要求
 3. 承認または地位に対する要求
 4. 身体的満足に対する要求
- 8) ソープ (L. P. Thorpe) の分類 (L.P. Thorpe, The Psychology of Mental Health, 1950, PP. 39—41)。
1. 有機体的要求……身体的健全性を維持する要求
 2. 自我的要求……承認を求める要求
 3. 社会的要求……安定感・安全・愉楽を決める要求。その他、社会に対する助力、協同、愛情と博愛などの協力的なものを含んでいる。
- 9) サンフォード 1. 社会的要求 2. 情緒的要求 3. 知的要求
- 10) フェントン (N. Fenton 1944) は、精神衛生を説く立場から7つをあげる (N. Fenton, Mental Hygiene in School Practice, 1943)。
1. 健康な身体と良い立派な体格および美しい容姿に対する要求
 2. 安定感の要求
 3. 社会的適応および社会的承認に対する要求
 4. 優越感の要求、力の感情に対する要求
 5. 自己の条件および現実を受認することができるという要求
 6. 好奇心や愉楽を経験し、すなわち、新奇な経験・喜ばしいことの経験、積極的な変化に富む興味を獲得することに対する要求
 7. 発展しつつある人格と考えられることに対する要求、自己の個性の発展に対する要求

11) チョールマン (R. C. Challman) の分類 (A. I. Gate et al., Educational Psychology, 1948 (3rd ed.) PP. 618~619)。

1. 有機的要求 (Organic needs) ……空気・食物・液体・適当な温度・休息・睡眠・排泄などの要求, 性的満足や活動を求める欲求。
2. 人格的要求 (Personality needs)
 - a. 愛情の要求
 - b. 所属の要求
 - c. 成就の要求
 - d. 独立の要求
 - e. 社会的承認の要求

註: Gates の教育心理学の旧版 (1942) には, チョールマンの分類での成就 (achievement) の要求の代りに, 自尊心の保持をあげている。

12) Maslow (1954) は, 基本的要求 the basic needs (biological and social) として次の5つをあげ, 且つそれを1を基底とし, 順次に5まで階層をなすものとし, 自己実現の要求が, 人格の頂点に位するものとした。

1. 生理学的要求 (physiological needs)
2. 安全性の要求 (safety needs)
3. 所属と愛情の要求 (belongingness and love needs)
4. 尊敬の要求 (esteem needs)
5. 自己実現の要求 (the need for self-actualization)

13) 精神病学者プラント (J. S. Plant 1937) は, 児童に関する広範な研究から, 児童の心理的要求のおもなものとして次のようなものをあげた。

1. 安定感の要求。
2. 所属感の要求。
3. 他のものとの同一性の要求。
4. 自己の内面的方を発達させ, かつそれを表現しようとする要求。
5. 成功の感情の要求。

14) フランク (L. K. Frank 1938) は, 児童の基本的要求を次の様に要約している (瀧永重次著「児童心理学」三一書房, 1956, PP. 55)。

1. 食事, 保護, 安息, 運動などの身体的要求。
2. 愛情, 保証などの心理的要求。

彼の分類は, 児童の要求を一層包括的な観点からとらえているので, 極めて価値がある。彼は次の様にいう。児童は, 彼自身の速度において成長し発達するために, 必要な食事, 安息, 睡眠, 遊びなどを要求する。児童のこのような身体的要求は, 児童の身長や体重の成長と状態と, 何らかの関係がある。さらに身体的要求は, 身長や体重や胸囲などの成長と, 関係があるだけでなく, 生理的機能の発達とも密接な関係がある。

さらに彼は, 我々に対して, 各児童の成長を, つねに平均値に接近させようとするのが, 必ずしも価値あることではなく, 大切なのは, 各子供が, つねに成長しつつある, という事実である, と教えている。

彼はさらに, 社会集団によって承認さるべき子供の要求と同様に, 子供に対する我々大人の要求の効果についても, 認識する必要があることを述べている。これを, 大人たちに

要求論 (Need Theories) —その1

対する重要な示唆であり、大人の好み・興味・躰の態度が、子供の要求を左右する家族的心理の認識を述べているのである。

15) レイーン (Lane, H. 1945) は、彼の児童の犯罪に関する研究の中で、児童の基本的要求として次ようなものをあげている。

1. 愛情における安定への要求
2. 友情と理解への要求
3. 権威への要求
4. 秘密についての要求
5. 娯楽の要求

例えば、友情と理解への要求においては、(1) 子供は、だれかと話すことを非常に欲する、のであり、(2) 子供は、友だちなしではいられない、のである。もし、語る友だちがなければ、どんな大人とでも、語りたいたするつよい要求を持つ。

秘密についての要求において、子供は、彼の私有物や、彼自身の考えを秘密にしたいと思うつよい要求をもつ。娯楽の要求において、子供が最初に犯罪をおかすのは、通例、娯楽を持つことにおける失敗から生ずる、と彼はいつている。

16) 瀧永重次の分類 (瀧永重次著「児童心理学」三一書房, 1956, PP. 52—55)。

1. 愛情の要求
2. 地位への要求
3. 所属感の要求
4. 他のものとの同一性の要求
5. 表現の要求
6. 成功の感情への要求

17) 牛島義友、松村康平らは、幼児の基本的要求を充足し、これを阻止するものを排除することを主目標として発達カリキュラムをつくり、基本的要求はつぎのようにした (守屋光雄著「発達心理学」朝倉書店, 昭37¹, 昭39², PP. 119)。

1. 情緒 (愛されたい心, 成就感, 自信, 美しい周囲)
2. 社会性 (独立, 所属, 承認, 協力, 理解, 伝達, 自己表現)
3. 知能 (探究, 自然の認識, 文化財の保存, 生命の尊さ, 計画性, 明晰な思考, 問題の処理)
4. 健康安全

かつての幼稚園令 (大15) では、保育項目として、遊戯・唱歌・観察・談話・手技の5項目が設定されていたが、戦後 (昭22) には文部省から「保育要領」が公にされて、この学校教育法に示された幼稚園教育の目標実現のため、楽しい幼児の経験を得させることを基礎として、①見学②リズム③休息④自由遊び⑤音楽⑥お話⑦絵画⑧製作⑨自然観察⑩ゴッコ遊び・劇遊び・人形芝居⑪健康保育⑫年中行事の12の保育内容の項目が提示され、これらの全てに要求は向けられているとした。

その後、「保育要領」における保育内容が系統的・組織的でないこと、保育内容と目標とのつながりが明示されていないことなどの点について批判が向けられ、昭和31年に、文部省から「幼稚園教育要領」が公にされ、次の5つの児童の基本的要求がまとめられた。

1. 健康で安全な生活を営む要求
2. 幼稚園内外における身近な集団生活に適応したい要求 (集団参加・所属・適応)

要求論 (Need Theories) —その1

3. 身近な自然に、興味や関心をもとうとする要求
4. ことばを正しく使い、童話や絵本などに興味を示す要求
5. 自由な表現活動によって創造性を豊かにせんとする要求。

幼児は、この5コの要求を潜在的に有するものとみなし、幼児の興味と要求とを遊離した主知主義的偏向に陥る保育をさけたのである。この保育内容としての経験領域を、①健康、②社会、③自然、④言語、⑤音楽リズム、⑥絵画製作の6領域に分けている。

18) 塚田毅の分類(「教育心理学」現代心理学体系4 共立出版, 昭31¹, 昭32⁴, PP° 194—197)。

彼は、人間の要求には色々あるとしながらも、その中で特に根源的な傾向を示すと考えられる要求を基本的要求 basic needs (cf. 園原太郎: 基本的要求の理論, 児童心理Vol. 6, No. 10, PP. 1—13.) とし次のように分類している。

基本的要求

1. 生理的要求 (physiological needs) ……有機的要求 (organic needs) ・体組織要求 (tissue needs) ……これには身体内部に生ずる欠乏の充足過程としての吸気および水や食物の摂取に対する要求, 体内の廃物の放出過程としての呼気や排泄に対する要求一定範囲を越える暑熱・寒冷や苦痛を回避しようとする要求, 休息・睡眠に対する要求等が挙げられる。かかる要求が高まる時は体内不均衡の指標としての緊張又は不快感又は不足感(内臓的緊張: Symonds, P. M.) が体内に生じているのであり, 実際にも体組織上の物理的あるいは生理的变化として現れてくる。

しかし彼は、動物の食欲に対する生理的以外の条件については、カッツKatz, D (1884~1953) の2要因説 (Zweikomponent-Theorie) (要求の働きは有機体の内部状態と外的環境との相互関係によって規定せられるという要求の場説) があることを指摘する。彼はカッツの指導下にバイエル (Bayer, E.) が行った実験 (1929) は鶏の食欲が社会的要因とでもいふべき外的条件によって左右せられることを興味ある実験例をもって示していることを註にあげている (cf. Katz, D.: Animals and Men, rev. ed., 1953, PP. 117—118. 塚田著 PP. 195脚註)。

2. 人格的要求 (personality needs)
 - 2—1 自我的要求 (ego needs) ……自己の発展・完成を目指すもの。
 - 2—1—1 探究の要求 (need for exploration) ……未知の世界に接触し新しい経験を徳たいという要求。(need for new experience)
 - 2—1—2 成就の要求 (need for achievement) ……価値のある仕事に従事し他人よりも優越してこれに成功したいという要求。need for accomplishment ともいう。
 - 2—1—3 独立の要求 (need for independence) ……他人に制約せられず自己の責任において決定し行動する自由を確保したいという要求。
 - 2—2 社会的要求 (social needs) ……社会的安定・充実を目指す要求。
 - 2—2—1 愛情の要求 (need for affection) ……自己と他人との間に相互に愛情や好意を分かちあって生活したいという要求。(need for interaction)
 - 2—2—2 所属および協同の要求 (need for belongingness and co-operation) ……集団に加入しその中の価値ある成員として認められて協同生活を営みたいという要求。

要求論 (Need Theories) —その1

2—2—3 社会的承認の要求 (need for social approval) ……自己の行為および人格が他人から承認せられ賞讃・尊敬せられたいという要求。

彼は、愛情の要求と所属の要求とは緊密な関係があり、この2つの要求が満たされることは人間が安定した生活感情を持つために重要であるとし、Challman, R. C. はこの2つの要求を安定感の要求 (security need) と呼び、成就・独立・社会的承認の3要求を充足感の要求 (adequacy needs) と称していることを紹介している (Challman, R. C. : "The adjustment of the individual", in Gates, A. I. et al., Educational Psychology, 3rd. ed., 1948, PP. 623~624)。

充足感の保持は人間が自信とか自尊とかいった自己信頼感をもって積極的・建設的な生活を営んでいく上に必要であり、これを欠くと劣等感 (feeling of inferiority) に陥入る。

さらに彼は、その他に、自我的要求に入るものとして所有・防禦・攻撃の要求を、社会的要求として支配・服従等の要求を付加している。

19) 阪本一郎も生活体にとって、もっとも基本的なもの (基本的要求) を分類している (阪本一郎著「図説児童心理」岩崎学術出版社, 1968. PP. 14~15)。

1. 生理的要求—生理的な不均衡を除去しようとする要求。
 - 1—1 器官の要求……生活体に欠くことのできない物質や条件を求めるもの。飢え、渇き、保温、排泄、性欲など。
 - 1—2 運動の要求……生理的なエネルギーが蓄積されたため、これを解放しようとするもの。
 - 1—3 休養の要求……エネルギーの消失を防ぎ、あるいは回復しようとするもの。休息、睡眠。
2. 人格的要求—個人的・社会的生活を営む上でも不足な条件を満たそうとする要求。
 - 2—1 愛情の要求……環境の人々との間の人間関係を、もっと親密にしようとするもの。
 - 2—2 所属の要求……自分にとって有利な集団に参加して、安定した位置を占めようとするもの。
 - 2—3 独立の要求……社会的に自立して、自由な行動を行い、自己を主張しようとするもの。
 - 2—4 承認の要求……自分の価値を周囲の人々から認められようとするもの。
 - 2—5 成熟の要求……自分の行動が成功し、能力が向上するように、新しい知識や経験を充実しようとするもの。

20) クローンバック (Cronback, L. J.) の分類 (Cronback, L. J. : Educational Psychology. Harcourt, 1954)。

1. 愛情の欲求
2. 権威者からの承認の欲求
3. 仲間からの承認の欲求
4. 独立の欲求
5. 自尊の欲求

21) クラインバーグ (Kleinberg, O) は、特定の行動や欲求が、すべての人間の間に見出される程度を、「信頼性」 (dependability) という概念で表現し、その心理的信頼度の程度性質の差に基づいて、基本的欲求を4種に分類した (Kleinberg, O. : Social Psycho-

logy. Holt, 1954)。

そしてこれが欲求であるという確証がえられる信頼性の基準は、次の三つについてである。

- ① 人間と他の動物との間に連続性、共通性が認められるものであること。
- ② 生化学的基礎が確認できること。
- ③ すべての文化に普遍的に認められること。

このような確証ある基準（信頼性）に基づいて、彼は4種の欲求を分類した^o

1. 生理学的基礎をもった、最も確証性の高い生理的欲求。これは、すべての動物に例外なしに認められる信頼性高いものである。

2. 性欲・母性愛・自己保存の欲求。これらは、生理学的基礎もあり、殆んどすべての動物に認められるが、個人差の大きい欲求である。

3. 攻撃性・回避・自己主張への欲求。間接的に生理学的基礎を有し、殆んどすべての社会で発現するが、集団的、個人的差異の大きい欲求である。

4. 所属・愛情・承認への欲求。生理学的基礎は認められず、二次的心理欲求と考えられるもので、すべての社会に可成り普遍的にみられる欲求である。これらの欲求は、元来は目標達成の手段となることが多い。

22) 山崎正の分類（山崎正「子供の発達と要求」児童心理 1952, 6, PP. 803—810）。

1. 身体的欲求
2. 安定への欲求（愛情・所属・承認）
3. 成就への欲求（成功・独立）
4. 価値への欲求

23) 戸川行男の分類（戸川行男「適応と欲求」1956, 金子書房）。

1. 生活欲求

1—1 官能欲求

1—1—1 非活動的……睡眠・休息（身体、感覚的快感の欲求。生理的基礎が明白で、原始的欲求である。）

1—1—2 活動的……遊びや身体的活動に関する欲求。走ること、歩くこと、話すこと。

これらの欲求には生理学的基礎がはっきりしない場合もあるが初歩的基本的欲求である。

1—1 鑑賞欲求

1—2—1 非活動的……文学・演劇・美術・音楽・自然などに関する自然美の審美的欲求である。

1—2—2 活動的……絵画製作・作詞作曲・創作自演など、科学的・文学的、芸術的創造や構成に従事する欲求。成就や獲得の欲求と関係が深いがいずれも、生活欲求は、文化創造の根源力たる生活のバイタリティーに関するものである。

2. 愛情欲求。原始的な性的な欲求から非常に高次の心理的な欲求までまたがっているが、この欲求における認知経験は、生きものであって無生物ではない（無生物の愛玩は、鑑賞欲求である）。また、この欲求の行動経験は自己中心的なものではなく、世話をし、育て、助け、協力し、相手のために行動するという献身的行動が伴い発展するということ

がある。性欲は官能欲求と同じく、生活活動の充足を求めて成立する 경우가多く、原始的であるが、人間の性欲求には、非常に心理的な人間性があるもので、原始的衝動と呼べないものがあるもので、これは、エロスとアガペの問題となるであろう。戸川は前者の原始的欲求を「愛行動の欲求」、後者高次の心理的欲求を「愛情体験を生じる行動への欲求である」として区別している（高野清純）。

3. 適応欲求。所属する集団の権威に服従して、その要請・命令・指示に適合するように行動しようとする欲求であり、そのような社会的適応によって、報酬を獲得しようとする欲求である。かかる「権威」というのは、親・教師・指導者や、その集団や社会に存する道徳・慣行・思想・法規などをさす。適応欲求は、最初、「権威」の行動を、その後再現する行動経験として認知されるが、やがてかかる同調行動と全く異なる自律的観念経験が、認知経験になるように発達していく。ここで観念的経験というのは、主として、言語を中心とする経験である。

4. 成就欲求。課業や仕事など、しなければならない事を遂行し、成就しようとする欲求。これは、それ自体が目的というより、他の欲求の手段となることがある。

例えば、適応欲求成立のための手段となる場合……多くの社会的要請に合致せんとする欲求が適応欲求であるが、それらの欲求を成立せしめる重要なものの1つとして、学業や仕事の成就遂行ということがある。そして、その成就や遂行が社会的要請に適合するということがある。

成就欲求は、生活欲求の手段欲求としても成立する。つまり鑑賞欲求満足のためには、それに必要な知識・技能・能力の獲得が必要となるが、これは成就欲求によって可能になる。こうして成就欲求は、欲求の障害の解決手段としても成立するが、成就欲求が未成熟で弱体であれば、他の欲求も不満足に終る。そして、成就課題の強度が大きければ、大きな抵抗をもち、他の欲求満足の障害ともなる。ここに欲求不満耐性が強くなければ、不適応を起すことになる。

5. 獲得欲求。獲得欲求は欲求の分化によって、生活欲求から生まれたものであるとされる。

6. 自我欲求。我を通そうとする欲求で、支配・優越・自己主張・自主独立・自尊・自由への欲求を含んでいる。

7. 逃避及び攻撃欲求。逃避欲求は、不快や苦痛の停止または軽減を求めるもので、その本質は、その行動より、行動の結果を求め、期待するものである。

攻撃欲求は、不快・苦痛・恐れ・憎しみ・怒りなどを生じさせる対象を攻撃し、破壊しようとする衝動で、自己の生活活動に対する禁止的な圧力の排除と障害克服を目指し、自我の欲求と相連関している。また、単なる破壊は、非常に情緒的な特徴がある。

8. 障害解決欲求。この欲求による場合、主体を変容して適合しようとする場合(adaptation)と、環境改善をはかろうとする場合(adjustment)とあるが、挫折する場合は、逃避の機制となり退嬰する。また、環境改善に急進的である場合は、攻撃の機制となる場合がある。(未完)

参 考 引 用 文 献

- 1) ガーディナー著、矢田部達郎・秋重義治訳「感情心理学史」理想社、昭和39(1964)(H. M. Gandiner, Ruth Clark Metcalf & John G. Bercbe-Center : Feeling and Emotion, A History

要求論 (Need Theories) —その1

of Theories. 1937.)

- 2) 心理学辞典 平凡社
- 3) 岩波心理学小辞典 宮城音弥編
- 4) 塚田毅著「教育心理学」現代心理学体系4, 共立出版, 昭32 (1957)
- 5) 阪本一郎著「図説児童心理」岩崎学術出版社, 1968
- 6) 瀧永重次著「児童心理学」三一書房, 1956.
- 7) 山下俊郎ら監修「児童学講座第6巻, 情緒・欲求・動機」金子書房・昭44 (1969)
- 8) 戸川行男著「適応と欲求」金子書房, 昭44 (1969)